

小学校国語科におけることばの教育に関する研究(2)

—ことば遊びで育む日本語表現力—

*津田 智史

A Study on Language Education in Elementary School (2):
To Develop Japanese Expression Skills through the Wordplays

TSUDA Satoshi

要 旨

本稿は、近年懸念される「語彙力」低下の対策として、語彙教育の改善方法を提案するものである。『国語編』で示されるように、語彙教育における課題は、語彙量を増やすだけでなく、語彙の体系的、機能的な質的理解を深めることである。また、その語彙知識を生かすための運用能力の育成も課題である。本稿では、運用にかかわる力を「日本語表現力」と呼び、その育成のための授業の方法を提案した。ことば遊びの回文を利用した言語活動である。回文作りをとおして語の選択と配列を考えることで、自身の語彙知識の運用や表現上の工夫などを学ぶことができ、「日本語表現力」が育成される可能性を示した。

Key words : Language Education (ことばの教育)

Wordplay (ことば遊び)

Palindrome (回文)

Japanese Expression Skills (日本語表現力)

Japanese Teaching (国語科教育)

1. はじめに

近年、若者を中心に「語彙力」の低下が話題に上がることが多い。いわゆる若者ことばに代表されるように、広範囲の意味に対応する汎用的な表現が多用され、細かな描写や説明を伴わないままそれらが使用されることが多いように思われる。「ヤバイ」などはその典型であろう。もちろん、こういった表現はある意味では便利であり、おおまかな意味を共有できることもあって、その使用は顕著である。一方で、「ヤバイ」は、ときにポジティブな意味を表したり、ときにネガティブな意味を表したりと、その表せる意味範囲は広がっている。「ヤバイ」については、「程度がはなはだしい」ことを表す程度の意味と理解することで、さ

まざまな場面で使用される意味を把握することは可能であろうが、その反面、細かな描写や説明を伴わないために、感覚的な理解にとどまってしまう。「ヤバイ」が多様な意味を担うようになるにつれて、もともとそれを表していたことばや表現のバリエーションが失われていくことが懸念される。

また、近年では「語彙力」ということば自体も広がりを見せている。SNSなどでは、次のような使用がみられる。Twitter のリアルタイム検索で「語彙力」と検索した結果、得られたものの中から、いくつか例示する。

1a) なんかも全部ひっくるめて可愛い(語彙力) (黒糖すん @立方隊、2020年9月25日午後6:20)

* 国語教育講座

1b) え、え、生放送やばくないか(語彙力消失)(鮭まぐろ、2020年9月25日午後6:20)

1c) 初りプ失礼致します。めっちゃ可愛すぎませんか…… 髪の毛のふわふわ感と目の形とお洋服がどれも好みすぎて、とても好きです…… なんとというか、語彙力消える程好きです…!!(すふいあ、2020年9月25日午後6:20)

(下線は筆者)

「語彙力」の使用のされ方はさまざまであるが、単純に語彙の総量を問題にしているわけではなさそうである。1a)は「語彙力がない」ということであり、「うまく表現できていない」ということを表しているようである。さらに、1b)は「語彙力」を「(日本語)表現力」と言い換えて問題なさそうな使い方である。つまり、一般に使用される「語彙力」は、どうやら「ことばを適切に使いこなす能力」という意味と認めることができそうである。Twitter上では、「語彙力」を検索するとかなりの数が該当するものの、多くの場合1abc)と同様、もしくは多少表現は異なるものの1abc)と同じであると判断できるような使用のされ方のようにみえる。このように、「語彙力」ということばを使用する際には、単に語彙の知識があるかどうかではなく、それを適切に使いこなしているか、駆使できているのか、といったことを表しているといえよう。一方で、1abc)のような使用は、自身の「語彙力」のなくなるほどの状況であることを暗示的に表す語用論的な機能を備えているとも考えられる。あえて、「語彙力」がない状況のようにふるまい(発言し)、その程度のはなはだしさを示すということである。これは、Twitterの字数制限(140字)にかかわって、限られた字数に収める工夫ともとれる。この点については、実際の使用者への「語彙力」調査が必要になるだろうが、「ヤバイ」の例などを考慮すると、「語彙力」が低下している可能性は捨てきれない。

このような現状を反映するように、岸江ほか(2010)などでは大学生を対象とした日本語能力テスト(漢字や慣用的な表現、敬語などの理解に関するテスト)の結果を提示しており、日本語能力の低下の実態を知る

ことができる。すべての大学生がそうであるとはいえないが、項目によっては日本語能力において弱点がみられる学生がいるのは事実である。そうであるならば、いわゆる「語彙力」について、学校教育のなかで段階的に育成していくことはできないだろうか。そして、そのためにはどのような方法で進めるのがよいのだろうか。本稿では、語彙教育の方法について検討しながら、そこには単なる語彙の量的な増加ではなく、質的な改善も必要であることを述べる。そのため、「語彙力」を「ことばを適切に使いこなす能力」という意味として「日本語表現力」と表し換え、小学校の国語科においてそういった力を育成するためのことば遊びを用いた活動の提案をおこなっていく。

本稿の構成は次のとおりである。まず、2節で「語彙力」という語の本質にせまりたい。いわゆる語彙とはなにか、私たちの生活やコミュニケーションに必要な「語彙力」とはなにかを明らかにしつつ、「語彙力」に潜む本質的な問題を指摘する。次に3節では、ことば遊びのひとつとして回文を取り上げる。本学が所在する仙台市と回文のかかわりや、回文の基本的な事項およびルールを確認する。そして、4節では、小学校の教育現場での語彙指導のあり方を平成29年に告示された新しい『小学校学習指導要領解説 国語編』(以下、『国語編』と略記)をもとに示しつつ、回文を用いた「日本語表現力」育成のための活動の提案をおこなう。最後に、5節でまとめと今後の課題を提示する。

2. 「語彙力」をめぐる

そもそも「語彙力」とはなにを指しているのだろうか。語構成からは、「語彙のための能力/語彙に関する能力」と読めそうであるが、それだと中身がはっきりとみえてこない¹。1abc)でみたように、「ことばを適切に使いこなす能力」という意味であるとみることが自然であろう。ここで、「語彙」と限定せず「ことば」とするのは、それが語彙という語の集合としての知識を超えたものであるととらえられるためである。語彙の知識そのものではなく、どのように使いこなすか、駆使していくか、という運用上の問題が絡んでくるた

1 同様の語構成である「読解力」は「読解するための能力/読解に関する能力」、「国語力」は「国語のための能力/国語に関する能力」と言い換えることができる。また、その意味も「語彙力」より明確であるように思われる。

めである。本稿では、そのようなことばの運用のための能力を「日本語表現力」と呼ぶことにする。以下、「語彙力」への本稿の立場を簡単に述べておくことにする。

2. 1 理解語彙と使用語彙

「語彙力」の表す内容については確認しておく必要があるが、その構成要素である「語彙」とはなにかということについては、議論の余地がないように思われる。「語彙」は、一般的に次のように示される。

- 2) ① 単語の集まり。一言語の有する単語の総体、ある人の有する単語の総体、ある作品に用いられた単語の総体、ある領域で、またはある観点から類集された単語の総体など。単語を集合として見たもの。

(『日本国語大辞典 第二版』「語彙」の項)

このように、ある観点からみた際の語の集合体を語彙と呼ぶ。では、一般に「語彙力」という際の語彙とは、どのような観点からの語の集合について述べているのだろうか。

その問いに答えるために、ここで① 理解語彙と② 使用語彙という用語についてみておきたい。まずそれぞれの表す意味について、石黒(2018)の記述を示す。

- 3) ① 理解語彙：耳で音声を聞いたり目で文字を見たりして意味が理解できる語彙
② 使用語彙：自分が話したり書いたりするときに使える語彙

(石黒2018：109)

意味としては読んで字のごとくではあるが、一般に私たちが知識として持つ語彙について議論する場合、3)のような語彙の区別をもって考える必要がある。また、私たちが使用している語彙はもちろん理解しているはずであるが、理解できる語彙を必ず使用するわけではないということを忘れてはならない。日常のコミュニケーションなど言語活動において使用する語は限られており、理解している語をすべて使用しているわけではない。そのため、理解語彙は必ず使用語彙よりも多くなる。

このようにみえてくると、昨今話題に上がる「語彙力」

の「語彙」が示すものは、② 使用語彙であることがわかる。1abc) などでは、自身が使用する(もしくは使用できる)語の量や質、そしてその運用方法が問題となっているのである。そのため、「語彙力」の育成を目指す際には、② 使用語彙を増やしていく必要がある。

さらに、日常的に使用する語彙については、生活に根付いたものや、使用場面や状況に限られるもの、学習場面でしか培われないものなどがある(鈴木2019：5)。ある程度状況や用途に応じて分類して考えることで、どのような語彙が必要となるのか、どのような語彙の量や質を優先的に改善していくべきなのか、語彙教育へのヒントがみえてくるはずである。小学校における語彙教育の課題と改善策については、『国語編』に次のように示されている。

4) 語彙指導の改善・充実

中央審議会答申において、「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」と指摘されているように、語彙は、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となる言語能力を支える重要な要素である。このため、語彙を豊かにする指導の改善・充実を図っている。

語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。具体的には、意味を理解している語句の数を増やすだけでなく、話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。

(『国語編』p8、下線は筆者)

このように、語彙教育には、量と質の両面からの対策が必要であることを示している。そして、語自体への深い理解や運用能力も求められている。

続いて、どのような語彙をあつかい、どのように学習していくのがよいかについても検討しておくべきだろう。

まず、どのような語彙をあつかうかについてみていく。専門的な用語は使用が限定的であるし、趣味・興味・関心に関する語は自ずと身に付いていくはずであ

る。学校教育や学習場面でしか培われないものについても、知識としては重要だが、日常的な使用については限定的である。そうであれば、まずは身近な日常コミュニケーションで使用する語彙について、改善を図ることが重要になると思われる。もちろん、日常使う語に定着させるためには、まずはその語を理解することから始めなければならない。その点で、理解できる語彙の下地は重要であり、理解語彙のうえに使用語彙があることをしっかりと認識しておく必要がある。

次に、日常的なコミュニケーションで使用する語彙を育てていくためには、どのように学習していくのがよいだろうか。現状では、教科書の文章や語句を理解することを主とする語句指導が中心であり、語自体の深い理解や、関連する語彙の理解などについてはあまり重視されていないように思われる。その点で、語を単体としてではなく、語の総体としてみていく必要があるだろう。ある語を学んだとき、その語には類義語や対義語、上位・下位語などが想定できる。そういった関連する語彙や表現全般を視野に入れ、語彙知識を拡充していくことが必要である。個々に語をあつかえば、それ相応の数になるが、関連づけてあつかえば、ある程度スリムで整理された形で把握することができるようになる。具体的な指導としては、多くの語彙をただ知識として入れていく詰め込み型の指導ではなく、語同士を関連づけていくことで語の関係性を考えさせる指導ということになる。児玉(2017)が述べるように、活動をとおして学びを自覚することが重要である。語同士の関係性に注目し、考えを共有することで知見を広げ、深め、高めることが、よりよい語彙教育の形であろう。それが、『国語編』の求める語彙の質の面の改善ということにつながっていく。さらに、語彙の指導としては、アウトプットを増やして実際に運用させることも重要である。それにより、理解語彙が使用語彙へとつながっていくのである。

2. 2 「日本語表現力」とその課題

いわゆる「語彙力」の低下が叫ばれる昨今、『国語編』も言及するように、単純に使用語彙の量を増やすだけでは、日常のコミュニケーションなどで活用でき

るとは言い難い。仮に、同じ意味を表す語であっても、同じような言い回しや表現で使用できるわけでもないし、それらがどのように使用される／使用できるのかについて、身に付けていかなければならないだろう。つまり、「語彙力」の低下という問題には、知識としての語彙量が大きくかわるのではなく、その語に関する深い理解や、どのようにその語を使用するかといった、語の質的な面や運用の面が大きくかわってくるのである。それらが「語彙力」の育成にかかわる本質的な課題といえよう。本稿では、とくに語を運用するうえでの「日本語表現力」と結びつけて論じていく。

それでは、「日本語表現力」はどのように育成していくのがよいであろうか。その方策のひとつとして、岸江ほか(2010)に、読書が日本語能力改善に有用であるとの指摘がある。また、玉村(2019)は読解力・語彙力の不足にはさまざまな原因が考えられるとし、次の4つを挙げている。

5) 読解力・語彙力の不足要因(玉村2019)

- ① 読書の減少
- ② デジタル機器への依存傾向
- ③ 家庭でのコミュニケーションの減少
- ④ 日本の伝統的な言語文化に触れる機会の減少

これらは、社会や環境の変化による要因であるが、若者の言語生活や言語意識に大きな影響を与えていると考えられる。しかし、たとえば①の読書量を増加させることでどれほどの改善がみられるのかという点については、検討の余地がある。玉村(2019)も述べるように、読書のためには、書かれている文章を理解するための語彙を増やさなければならない。そうであるならば、やはり読書指導以前の語彙指導が必要となる²。その教育は、量的なものではなく、語そのものへの理解を深めるための質的かつ運用につながるものであるべきである。

また、「日本語表現力」について改善を図る際に大きく問題として顕在化するの、語や表現、言い回し

2 玉村(2019)は、語彙体系の理解のために語彙指導が重要であり、語彙の構造や体系に関する知識を得る必要があることを述べている。また、限られた時間のなかで効率よく学習するために、系統立った語彙指導の方法の提案をおこなっている。

のバリエーションの問題である。冒頭でも述べたが、「ヤバイ」などはさまざまな意味を表せるために、使用する世代はそればかりを使用し、ことばのバリエーションを失いつつある。鈴木(2019:27-30)は、「このラーメン、ヤバイ」は文脈次第で意味が変わるものの、話し手と聞き手が意味を迷うことなく判断できることを述べる。しかし、「ヤバイ」は便利さゆえに、同時にさまざまな表現や言い方が失われていくことを指摘している。鈴木(2019)の例示を借りれば、おいしいということばには、次のような具体的な表現や言い回しがある。

- 6) コクのある／味わい深い／味わいのある／深みのある／旨みがある／旨味がある／ウマ味がある／うま味がある／ウマイ／旨い／味わいがある／いい味出してる／甘露甘露／美味しい／美味しい／味がある／味のある／風味がよい／オツな味

(鈴木2019:28-29)

表現の問題だけではなく、表記上でもかなりのバリエーションがあることがわかる。さらに、それに加えて比喩的な表現も使用されることがあり、そのバリエーションは枚挙にいとまがない。そういった表現が、徐々に失われつつあるのである。

以上のように、語彙教育には語彙の質的な理解や運用につながる実践活動が必要となる。語彙の質的な理解は、運用のための知識となり、表現のための多様性の基盤となる。つまりは、どのように運用するかという「日本語表現力」を育成していくことで、その基盤となる語彙の質的な理解も高めることになり、語彙教育にも大きく貢献するのである。

3. 回文について

本節では、ことば遊びの回文についてみていきたい。なぜここで回文をあつかうのか、回文を利用することでどのような力を育むことができるのかについて簡単に触れることにする。

さて、まずは回文とはなにかという点を確認しておきたい。以下に、半沢ほか(2008)と仙台・作並回文の里づくり実行委員会(2012)が示す回文の解説を載

せる。

- 7a) 「回文」とは、ある語・句・文において、その最初から読んでも最後から読んでも同一の表現になるものをいう。

(半沢ほか2008)

- 7b) 回文は、「たけやぶやけた」や「いかたべたかい」などのように上(先または始め)から読んでも下(後ろまたは終わり)から読んでも同じ読みになり、意味がよく分かるような文章のことです。

(仙台・作並回文の里づくり実行委員会2012)

なお、7ab)は、日本語、とくにひらがなやカタカナなどの仮名表記を使用した場合の回文の解説である。外国語にも回文はみられ、その場合にはアルファベット表記によって回文が作られる。有名なところでは8a)がそれである。また、8b)のように日本語においてもアルファベット表記で回文を考えることは可能である。8b)の西尾維新は、「物語」シリーズなどの著作で知られる小説家であり、氏のアルファベット表記は回文となっていることがわかる。

- 8a) Madam, I'm Adam.

- 8b) akasaka (赤坂) / Nisio Isin (西尾維新)

7)と8)をみてもわかるように、どの表記をもとに考えるかによって、回文の作り方は変わってくる。本稿であつかう回文は、仮名表記を用いて作成されたものとする。

3.1 仙台市と回文

ところで、本学が所在する宮城県仙台市と回文には浅からぬ関係がある。江戸時代末期の仙台には、廻文師である仙代庵(1796~1869)という人物がいた。生涯に千を越す回文を作ったことで知られており、人を楽しませて生涯を送った人物だという。その仙代庵の生まれ年が作並温泉(宮城県仙台市青葉区作並)の開湯と同じ年であったのと、作並の美しさを詠んだ氏の代表作(9)の回文があることから、作並温泉を回文の里とし、回文の隆興とことば遊び文化の発展を図っている。

- 9) みな草の 名は百と知れ 薬なり すぐれし
徳は 花の作並³

作並温泉の旅館組合が中心となり、平成11年度から回文コンテストが開催されている。そのコンテンツの回数は、平成31(令和元)年度で22回を数え、平成29年からは夏季に「仙台市夏休み子ども回文コンクール」も開催されている。回文コンテストでは、平成24年時点までに通算1万2千点近くの回文が集まったということであり、北海道から沖縄まで全国各地から応募がみられるという(仙台・作並回文の里づくり実行委員会2012)。第22回のコンテストにおいては、自由の部と課題の部で募集がなされた。自由の部には、作並温泉賞の部(作並温泉をイメージする35字以内の回文で、「作並」の文字は問わない)や、チビっ子の部(小学生限定で、字数7字以上35字以内の自由な文章)などがある。課題の部では指定された写真(第22回では、こけし塔、朝もやの広瀬川)をもとに回文を作成することになっており、読みの字数が35字以内の回文という指定がある。受賞作品など、コンテストの結果は回文の里のHPに公開されている(「回文の里 作並温泉」<http://kaibun.mcpc.jp/>)。

このように、仙台市には回文に親しめる土壌がある。これはひとつの強みであり、教育現場からすれば、このような格好の題材を放っておく手はないだろう。また先述のとおり小学生を対象とした賞が用意されていることもあり、児童のやる気を引き出す環境も十分である。付言すれば、回文を授業で取り上げることは、ことば遊びとしての回文への興味・関心をひくことになり、ひいては児童のことばへの関心を引き出すことになる。さらに回文コンテストの隆興にも一役買うことができ、地域の活性化にもつながっていくのである。

3. 2 回文の基本的なルール

それでは、回文の基本的なルールについても確認していきたい。ここでは、仙台・作並回文の里づくり実

行委員会(2012)に記載される基本的なルールを要約して抜粋する。

- 10) 1、上から読んでも下から読んでも必ず同じ読みになること
- 2、長さは自由であること
- 3、文章として意味がわかること

10-1)は回文の根本的な大原則である。前節で言及したように、仮名表記での判断であり、「は」と「ば」と「ぱ」、「た」と「だ」、「し」と「じ」および「は」と「わ」、「へ」と「え」、「お」と「を」、「づ」と「ず」、「じ」と「ぢ」、などの仮名表記上の違いは許容されることになっている⁴。ただし、長音の省略は許容しないということである。10-2)は、回文としては文章の長さに決まりがないということである。もちろんコンテストなどでは字数制限があったり、俳句形式が求められたりする場合があるが、回文自体には長さの制限はないということである。とはいえ、「すず」や「もも」などについては回文とは認めづらいのは事実であり、ふたつ以上の語の組み合わせを必要とするということである。そして、10-3)は文章である以上、人に伝わるものであることが求められるということである。ただ語や文字を並べるだけでは回文とは呼べないのであり、回文は文字(もしくは語)の羅列ではないということである。ただし、非現実的な内容の作品であっても文章として非文でなければ許容してよいだろう。それは解釈の余地があると判断できるためである。

ほかにも、回文をあつかった書籍やコンテストにより、独自のルールを採用している場合がある。ただし、本稿であつかう回文は小学生を対象としていることもあり、簡単かつわかりやすいルールであることが望ましい。たとえば、せと(2019)などでは「同じ音というのが大切で、濁音・半濁音・促音・拗音なども「行き帰り」同じでなくてはなりません⁵」とするが、小学生などには厳しすぎるルールといえる。ことば遊びを

3 「草は百種類ほどもあろうか、みな薬である。その優れた効き目は花の盛んに咲き乱れる作並のようだ」という意味を表している(仙台・作並回文の里づくり実行委員会2012)。

4 これに加え、仙台・作並回文の里づくり実行委員会(2012)では「う」と「ふ」などの仮名の違いも許容する。ただし、小学生においては歴史的仮名遣いやハ行転呼音の知識がないため、この違いはひとまず無視することが望ましいと思われる。また、記載はないが、受賞作品をみると「つ」と「っ」、「や」と「ゃ」についても許容されることがわかる。

5 せと(2019)は「同じ音」としているが、これは表音文字としての仮名表記のことを指していると考えられる。より厳密には、「同一の文字表記」ということであろう。

ととして、ことばへの興味を引き出すことも目的と考えると、まずはできるだけゆるいルールでおこなっていくことが重要であろう。また、幸いにも仙台では回文のコンテストが催されており、その規程に準じておこなっていくのが一番効率的であろう。よって、本稿でも回文をあつかう場合には、基本的には仙台・作並回文の里づくり実行委員会(2012)に明記されるようなルールに準じて進めていく。授業内で児童が作った出来のよい作品などは、そのままコンテストに投稿もでき、児童のやる気をうながす効果も見込める。

このようなルールのもと、回文で育むことができる力とはどのようなものであろうか。半沢ほか(2008)には、回文の作成による活動のねらいが大きく2点、示されている。どのような語を選ぶかと、どのように並べるかという、語の選択と配列にかかわる能力の育成である。前者の語の選択については、日常の会話以上に気をつかう必要がある。どのような語でも並べればよいというものではないので、まずは回文に使えるような語とはどのようなものかを考えなければならない。また、後者の語の配列については、回文に使えるような語をどのように並べていくかということである。10-3)でも確認したように、回文は意味のある文章でないとならないので、語の配列には気をつかう必要がある。うまく語を配列することで人に伝わる内容を構成できるように、自身の語彙知識を活用しながら考えていかなければならない。このようなことば遊びを経験することにより、語の選択と配列に意識を向けるようになり、全体としてはどのように、どのような内容を表現するのかといった、ことばの運用にかかわる力を育成できるはずである。

4. ことば遊びを用いたことばの教育

それでは、ここからことば遊びとしての回文を利用した「日本語表現力」育成のための活動提案をおこないたい。基本的な作業はシンプルであり、どの学年においても実施可能なものとする。以降で示す活動について順を追っておこなっていくことで、最終的にどのような長さであっても回文をひとつは作成することができるだろう。加えて、賞コンテストが地域で開催されているので、児童同士で投稿作品を検討したり、好みの作品、よくできた作品の投票などをおこなった

りすることもよいだろう。高学年になれば、複雑な作品も作ることも可能になろう。

4. 1 初等教育における語彙の指導

新しく平成29年に告示された『国語編』には、語彙指導の充実が掲げられている。そこでは、すでに4)でみたように量だけでなく質的な面での改善が求められている。塚田(2018)はこの『国語編』の記載から、今後の語彙指導のうえで「語義の記憶を中心に行われる語句・語彙指導で習得されたものが、「生きた語彙力」として機能するかどうか」が課題であるとする。従来おこなわれてきた語の知識を得る学習が実際の語の運用に結びついていないことが問題であるとするのである。これは、初等教育だけでなく、中等教育においても同様であり、語の体系的および機能的な特質を理解し、運用の実践を重視しなければならないことを示している。また、堀畑(2019)では、日本語学の視点から小学校における語彙指導について言及している。氏は『国語編』に記載されている各学年の「語彙指導の方向」を検討し、小学校においては「言葉や語句の学習、漢字の学習を積み上げていくが、それらを「理解語彙」から「表現(使用)語彙」に代えて定着させることが大事である(括弧内は筆者注)」と述べる。また、一般に私たちが習得する語彙のうち、40%強が小学校3年生から6年生で習得するものだという先行研究のデータを示し、この時期の語彙指導の重要性を指摘している。

それでは、そういった指摘のうえで、これからの語彙指導はどうあるべきなのであろうか。まずは、語彙指導のあり方であるが、これはすでに述べてきたように、質的な理解の深化が必要である。つまり、どういった機能性や体系性をもつ語なのか、どのように運用できる語なのかを、児童・生徒自身が考えることが必要ということである。もちろんインプットとしての理解語彙を増やすことは重要である。しかし、語の知識を詰め込むだけでは、それをうまく運用できるかに課題が残る。そのため必要となるのは、その語を深く知るための知識であり、それを運用する実践である。前者の習得のためには、すでに述べたように類義語、対義語、上位・下位語など、関連する語の機能的な知識や、全体の体系性を把握することが重要となるだろう。後者の習得のためには、得た知識を話しことばや書きこ

とば、授業内のさまざまな活動で実際に運用してみるということである。できれば、その際に自然とその知識を運用できる実践活動があると望ましい。

次に、初等教育においてはどうかあるべきかについても述べておく。堀畑(2019)にも指摘があるように、小学校における学習は語彙知識にとってかなり重要な位置を占めている。そのなかで、ただむやみやたらに理解語彙の量を増やしても、それらの運用方法がわからなければ、実際に使用することができない。その点で、読書や名句、名詩など、いわゆる名著と呼ばれる作品に出会い、実際に読んでみることは重要であろう。しかし、実態として小学生(だけでなく若い世代)の読書量が低下しているなかにおいては、ことばの多様性やその機能的側面を知り、ことば自体に興味・関心を持つことが重要と考える。言い換えれば、言語生活上のことばを中心に習得することが大事ということである。国語科教育においては、学年と成長過程、学習に合わせて文章が選ばれており、高校を卒業するまでに多くの名文や名著に目をとおすことになる。初等教育の段階では、それらの名文・名著を積極的に読むことに向かわせるための段階的な素地形成として、ことばへの興味・関心を引き出すことを中心におこなっていくことが重要だと考える。そのための活動については津田(2018・2020)でその一端を述べているが、本稿ではとくに語彙の指導にかかわるものの一部としてことば遊びを取り入れた活動を提案する。次項で示すのは、語彙知識の運用に関する部分であり、本稿で「日本語表現力」とする力を育むための活動である。

4. 2 回文で育む「日本語表現力」

前述のように、回文を作るということは、語の選択と配列ということばの基本的な表現上の考え方を学ぶことであり、またどのように選択、配列すればよいかという表現上の特性や工夫を学ぶことにつながる。つまり、回文を作るには語彙の知識と発想力が必要となるということである。もちろんある程度しっかりとした長さや内容のものを作ろうとすれば格段に難易度が上がるが、初等教育(および中等教育など)では、無理に長いものや厳密なものを作ることはせずに、あくまでことば遊びとして活動をおこなうことが重要であろう。また、どのような作品であれ、形にできた際には完成の喜びも得ることができる。地域コンテストに

作品を応募することも可能であり、児童・生徒のやりがいやる気をひき出すことも容易であろう。

それでは、具体的にどのように回文を用いて「日本語表現力」を育成していくか、その活動について示していく。おおよそ2時間分を配当時間とする。授業のねらいと活動は次のとおりである。

[授業のねらい]

回文をとおして、日本語の語の特質や文章の配列の規則に触れるとともに、ことばの運用方法について考えを巡らせていき、語や表現の多様性を学ぶ。また、ことば遊びのおもしろさや魅力を知る。

[活動内容] : (1)(2)(第1時)、(3)(4)(第2時)

- (1) 回文の基本的なルールを知るとともに、具体的な作品に触れて回文のおもしろさや魅力を知る
- (2) 穴埋めなど、回文を作るための思考方法に慣れる活動をおこない、回文自体に慣れる
- (3) いくつかの段階を踏みながら、回文作成の方法や工夫を知る
- (4) グループに分かれて回文を作り、完成した作品を共有する(作品は相互評価、投票などするのよい)

以上のようなねらいと活動で進めていく。第1時は回文の基本的な内容と、回文自体に慣れるための時間である。一方で、第2時は回文を作るための活動であり、(3)は個人、(4)はグループでの活動である。以下、授業の展開と活動について具体的にみていきたい。

第1時

回文の基本的な事項について説明する必要がある。7ab) や10) の回文の説明を提示し、具体的な例を挙げてみせる。まずは、短くて、構造のわかりやすい回文を提示することにより、回文がどのようなものかを知ることが重要である。たとえば、次のようなものを提示するとよいだろう。なお、ここで例として示す回文は、参考文献から引用したものである

11a) 「^{にく}の^{くに}国」「イカに^{かい}貝」「^{さいがい}災害の^{いがい}意外さ」「ウイ
と^い言う」

11b) 「うそつききつそう」「今朝^け食^{きた}べた^{さけ}鮭」

11c) 「たい^や焼き^や焼いた」「ニワトリとワニ」「あ　こ
ここにココア」「田^{いな}舎^{かい}行かない」

11a) は、反転して意味を成す語を助詞によってつないだものである。「の」「に」「と」など一文字の助詞で挟むことで、容易に回文を作成できることを理解する。このようなものが回文を作る際に最もシンプルで簡単なものである。第2時で実際に反転して別の意味になる語を挙げる活動をおこなうが、その前提として回文の基本的な形をここで理解しておく。次に11b) は、語と語を反転して組み合わせたものである。「うそつききつそう」は反転した語を直接組み合わせたもので、「今朝食べた鮭」は「今朝／鮭」で「食べた」を挟み込んだものである。そして11c) は、単純に語を反転して意味を成すというのではなく、語の切れ目を越えて意味を成す語や表現になるように語をつなげたものである。ここまでくると少し難易度が高くなるが、こういったことができるという事前知識を入れておくことで、創作の幅が広がっていく。

加えて、11) の例をみていくと、次のようなことにも言及できる。11a) の「ウイと言う」を作るためには、「ウイ (Oui) 」というのがフランス語の肯定の返事であるという知識が必要である。肯定を表すためには日本語では「はい」や「うん」、英語では「イエス (Yes) 」が使用されるが、この回文では「ウイ」でないと成り立たない。このように、同じ内容を述べるにもさまざまな表現が可能であろうことに気づくことができる。また、11c) の「あ　ここにココア」「田舎行かない」などをみていくことで、日常的に使用する表現での回文も可能であることに気づく。国語科教育において、教科書に準ずる活動の多くは規範的なことばの使い方を学ぶものであり、あたかも規範的で要素が十分にそろったものが正しく、それ以外が間違っているような印象を与えかねない。しかし、私たちが日常的に使用しているのは、完全な文ではない場合が多いし、要素がすべてそろっていなかったり、規範的でなかったりする場合も多い。回文を考えるにあたってはその点が非常に重要である。「ここにココア (がある) 」や「田舎 (には) 行かない」など要素が抜け落ちていても、意味伝達に支障はないし、十分に機能している。これらの例をとおして、日本語の表現の多様性を知ることができるのである。

11) などの例から回文がどのようなものであるのかについて知ることができれば、回文の作品自体、その表す意味、多様性から、回文への興味・関心を引き出すことができるだろう。その興味を広げていくために、穴埋め問題による回文の思考方法を学んでいく。まず12) を提示し、「回文になるように、() を埋めてみよう」という発問で考えさせる。なお、以下の12) および13) の問題は、仙台・作並回文の里づくり実行委員会 (2012) に記載のある段階的な回文作りの練習問題から抜き出している。

12a) 「えくほの娘　ふと見^み笑^えみ^と飛^とぶ　この()
へ」

12b) 「陽^ひが^の伸^のび^かた　閑^のかな^か角^の () の^か歌^ひ碑」

12a) には「僕」が入り、12b) には「旅」が入る。いずれも回文ということを理解していれば() を埋めることは容易である。表している内容も高学年であれば問題なく理解できるであろう。もし例のなかにわからない語があれば、辞書で調べるなどして語彙の蓄積を増やすとともに、表す意味内容の確認を相互でおこない、回文が必ずならんかの共有できる意味内容を表すことを確認する。なにより、日本語表現の多様性を知る機会とする。

12) の表す内容理解を終えたのち、次のような穴埋め問題をおこなう。12) と同様の発問で進める。

13) 「たいてい() いていた」

13) の空欄に入るものはなんであろうか。仮名一文字を入れていくのが簡単なものであり、回答にはバリエーションが見込まれる。もちろん仮名二文字以上でも問題はなく、児童の考える力・発想力を養うことができるであろう。一文字の可能性としては14a) の例が、二文字としては14b) の例が考えられよう。

14a) 開^あ／書^か／咲^さ／炊^た／鳴^な／掃^は／巻^ま／焼^や／湧^わ など

14b) 叩^{たた}／つつ など

14a) には、ほかにも「聞(いて)」や「解(いて)」なども考えられる。中学生以上であれば、文法の動詞の活用の知識があるので、語幹が一文字であるカ行五

段の動詞が基本的にここに入ることに気づくことができるだろう。小学生の場合にも、勸のいい児童は「〇いて」というようなイ音便になる形を探して、あてはめてみることで多くの可能性を見出すことができるであろう。なお、大学の講義内で同様の発問で活動をおこなったときには、14c) のような回答もあった。これは事前にまったく想定していなかったものであるが、たしかに回文となる例である。このような思いもよらぬ発想に出会える機会があるのも、ことば遊びや回文の楽しさであろう。

14c) (たいてい) ^{しんぶんし}新聞敷 (いていた)

ここまでが第1時である。本稿では簡単に記しているが、回文の意味の理解には十分に時間をとってよい。わからない語を辞書で調べる作業にも時間を取りたい。児童が主体的にわからない語を調べ、文章の意味を理解し、相互に情報や知識の共有をできる環境を提供することが重要であろう。

第2時

第1時で回文の基本的な事項を理解し、回文自体への理解を深めているはずである。そして、回文への興味も深めているはずなので、第2時には、実際に作ってみるといふ活動に入る。ここで合わせて、仙台市と回文の里とはかかわりがあり、コンテストなどもおこなわれていることを伝える。必須ではないが、作った回文はクラス内で相互評価し、評価の高いものをコンテストに応募することにしておいてもいいだろう。コンテストがあること、良作は受賞の可能性があることなどを伝えることでやる気をうながすことは、ひとつの手段である。

それでは、第2時の具体的な活動を示す。いきなり長くて複雑な回文を作ることは不可能に近いので、段階を踏みながら回文作りに慣れていく。まずは、「仮名3字から成る語で回文になっているもの」を探すことから始める。個人で考えたのち、黒板に書かせるなど、共有する場を設けたい。児童から出てくる可能性があるのは、たとえば次のようなものである。以下示す例は、実際に大学の講義内で挙げたものである。

15) くだい／うたう／かんか／きせき／くらく／
こねこ／しめじ／たべた／てだて／とまと／
はっぱ／みなみ／やおや など

名詞だけでなく、動詞、形容詞など用言などにも意識がいくように導きたい。そして仙台で実施すれば、ここに「いずい」などという方言語彙も出てくる可能性がある。さらに、忘れてはならないものがある。ぜひ本活動を実施する授業科目「^{こくご}国語」という回答も引き出した。

ある程度出つくしたら、続いての問いに移る。「仮名2字以上から成る語で、最後から読んで別の語になるもの」を探していく。ここでは、最初から辞書を用いて探してもよいことを伝え、逆さにしても意味がとおるものをみつけていく。都度、わからないものについては辞書を活用して調べるようにうながす。ここでは、次のようなものが挙がってくるだろう。

16) かお⇔おか／きく⇔くき／きた⇔たき／けさ⇔
さけ／しめ⇔めし／すき⇔きす／する⇔す
／つま⇔まつ など
きいと⇔といき／くすり⇔りすく／くるみ⇔
みるく／てんぐ⇔ぐんて／みんか⇔かんみ／
よいこ⇔こいよ など

「かお⇔おか」や「くるみ⇔みるく」などのように名詞と名詞の対応もあるが、「つま⇔まつ」や「よいこ⇔こいよ」などのように名詞と動詞（活用形含）の対応も考えられる。名詞と名詞の対応に限らないことを、机間指導をしながら伝えておくことも重要だろう。

ここまで終われば、簡単な回文を作ることは容易である。前時にみたように、16) で挙げた例を直接組み合わせたり、間に助詞を挟んでくみ合わせたり、11b) でみた「今朝食べた鮭」のような例も作ることができる。「16) で挙げた語同士を直接組み合わせ、あるいは1字の助詞を間に入れてつなぎ、回文を作ってみよう」といった発問で、回文作りの活動に入る。いくつかできた段階で、グループに分け、自身の回文を紹介するとともに、グループで少し複雑な回文を作るための作業に移る。

仙台・作並回文の里づくり実行委員会 (2012・2017) や回文の里のHP、ほかにも一般書籍など、回

文の例を印刷したものを配付し⁶、それをみつつ回文作りを進めさせる。15) や16) の活動にかかる時間にもよるが、できるだけグループでの活動に時間を取りたい。ひとりでは難しい回文作りも、複数で考えることにより、少しでも長く複雑なものを作ることが可能になろう。また、回文の例を多くみることで、語の運用や表現上の可能性を知ることができるだろう。そして、さまざまな刺激を受けつつ、意見交換しながら考えることで、思いもよらない発想に至ることがある。グループワークとするのは、意見交換、説明など、基本的なコミュニケーションの力を合わせて養いたいという目論見のためである。

以上のような活動でできた回文をグループごとに発表し、クラス内で相互評価・講評する。評価の高いものは、その年度のコンテストにクラスとして応募すればよい。作品完成の達成感とともに、相互評価・講評により主観的・客観的な価値判断があることも学べるだろう。最後は投票で投稿作品を選んでよいが、教員は完成した作品それぞれの価値を見出し、伝える必要がある。ここで完成した作品は同じ価値基準での評価が難しく、順位は評価をつける人の価値基準で決まることを伝えるのも重要である。合わせて、個人で作ったものは各々応募することができることを伝えておく。コンテストの結果が発表された際には、授業内もしくはHRなどで結果の共有をする。入賞すれば、表彰というわかりやすい肯定感が得られるだろうし、仮に入賞できなくても、入賞作品の評価や検討を別の授業でおこなえばよい。

5. おわりに

本稿では、近年懸念される「語彙力」低下の対策として、語彙教育の改善方法を提案した。語彙教育における課題は、『国語編』で示されるように、語彙量を増やすだけでなく、関連語彙との関係など体系的、機能的な知識を増やし、質的理解を深めることである。さらに、その語彙知識を生かすための運用能力の育成も課題である。本稿では運用にかかわる力を「日本語表現力」と呼び換え、その育成のためのことば遊びの

ひとつである回文を用いた教育方法を提案した。回文作りをとおして語の選択と配列を考えることで、自身の語彙知識の運用や表現上の工夫などを学んでいく。これにより、「日本語表現力」が育成されると考える。

また、本稿の言語活動は、学校教育で中心となる規範的なことばを教える授業とは異なるものである。規範的でなくとも、日常言語で使用されている表現などはあるし、それは十分にコミュニケーション上機能している。初等教育においては、より日常言語に近いことばを用いて、ことば自体への関心を深めることを進めるべきだと考える。今後は、そういった日常言語にもとづくことばの教育という点を重視し、方法論等検討していきたい。なお、本稿の提案にともなう実践的な検討は今後の課題である。

付記

4 節の活動については、本学における平成30年度前期授業科目「国語科教育実践体験演習(初等)」、同後期授業科目「国語 b」、令和元年度後期授業科目「国語 b」、上越教育大学における令和元年度後期非常勤授業科目「国語総合研究」において、大学生を対象として実施した実践の成果を含んでいる。また、本文中に例として示したものは、実際上記授業科目を受講した学生が講義内の活動で回答してくれたものである。多くの意見や感想を示してくれた学生に、記して感謝申し上げる。

文献

- 半沢幹一・深津謙一郎・倉田静佳(2008)『ことば遊びの日本語表現』おうふう
- 堀畑正臣(2018)「小学校における語彙指導をめぐる」『国語国文研究と教育』56
- 石黒圭(2018)『豊かな語彙力を育てる「言葉の感度を高める教育」へのヒント』ココ出版
- 岸江信介・仙波光明・堤和博・岡部修典・清水勇吉・坂東正康・村田真実(2010)「2009年度日本語力テスト実施報告」『大学教育研究ジャーナル』7
- 児玉忠(2017)「『主体的・対話的で深い学び』のための言語活動設定のポイント」『教育科学国語教育』809
- 今野真二(2019)『教科書では教えてくれないゆかいな語彙力入

6 先述のように、回文のルールはコンテストや書籍によりばらつきがあるため、活動で使用するルールに則った回文の作品例を示すことが重要である。

- 門』河出文庫(同2017『大人になって困らない 語彙力の鍛えかた』河出書房新社の文庫版)
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社
- 仙台・作並回文の里づくり実行委員会(2012)『簡単にできる回文 面白ユーモア回文 驚きの優れた回文の作り方』
- 仙台・作並回文の里づくり実行委員会(2017)『第19回日本ことば遊び・回文コンテスト 入選作品・応募作品集』
- せとちとせ(2019)『笑う回文教室 アタマを回してことばであそぼう』創元社
- 鈴木一史(2019)『国語教師のための語彙指導入門』明治図書
- 小学館辞典編集部(2000-2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 玉村禎郎(2019)「語彙の理解を深める効果的な教育とは—国語教育への提言—」『杏林大学外国語学部紀要』31
- 塚田泰彦(2018)「新学習指導要領に提示された語彙力とは何か」『日本語学』37(11)
- 津田智史(2018)「ことばの教育としての国語教育を目指して」『宮城教育大学紀要』52
- 津田智史(2020)「小学校国語科におけることばの教育に関する研究(1) —あいまいな文と係り受け—」『宮城教育大学紀要』54

参照 URL

- 回文の里づくり実行委員会「回文の里 作並温泉」
(<http://kaibun.mcpu.jp/>) (2020年9月28日最終アクセス)

(令和2年9月30日受理)